

氏名(国籍)	きむ じょん ひよ 金 貞 孝 (韓 国)
学位の種類	博 士 (学 術)
学位記番号	博 甲 第 3622 号
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	体育科学研究科
学位論文題目	日本近代と小説文学にみる身体性 - 鷗外と漱石を中心に -
主 査	筑波大学教授 博士(文学) 佐藤 臣 彦
副 査	筑波大学教授 博士(教育学) 阿 部 生 雄
副 査	筑波大学助教授 博士(体育科学) 中 込 四 郎
副 査	筑波大学教授 博士(医学) 高 橋 正 雄

論 文 の 内 容 の 要 旨

(1) 研究目的

本研究は、身体が具体的な人間の営みの中でどのように表現されてきているかという問題意識のもと、日本近代において新たに現れた身体性について、近代日本を代表する文学者、森鷗外と夏目漱石に着目し、二人が造形した小説世界における身体性の分析を通して、彼ら以前の時代には自覚されることのなかった人間存在に対する新たな理解を明らかにすることを目的としている。

(2) 研究方法

本研究では、鷗外と漱石が生きた近代について、年代記的に記述する通時軸的アプローチではなく、「立身出世主義」および「父性」という概念を通して明治から大正に至るまでの時代を再解釈することで近代的身体を分析する枠組みを提示している。その上で、漱石、鷗外がともに共有する留学体験に着目し、両者の研究対象がそれぞれ「文学(英文学)」と「自然科学(衛生学)」にあることに起因する身体認識の相違を仮説的に設定し、漱石にあっては「個の身体」、鷗外にあっては「公の身体」という視座のもと、両者の作品を分析する方法論を援用している。

(3) 論文構成と概要

本論文は、序論(予備的考察：(1)問題の所在、(2)先行研究の検討、(3)研究の方法)、本論全4章、および結論(本研究のまとめと今後の課題)から構成されている。

第1章「立身出世主義と日本の近代」では、序節：「立身出世」という近代的現象、(1)思想としての立身出世主義(①「明六社」と立身出世主義、②福沢諭吉の啓蒙思想と立身出世主義、③プロテスタンティズムの倫理と立身出世主義)、(2)近代小説における立身出世主義(①近代小説の登場と立身出世主義、②不条理としての近代-『浮雲』論)、(3)立身出世主義における身体(①見せる身体、②文化の転移と身体の転落)という構成によって、鷗外と漱石の作品を分析する前段階として、二人が生きた時代を「立身出世主

義」という観点を通して把握し、日本近代の形成における特異性について考察している。そして、明治新政府の教育理念や啓蒙思想の普及手段であった立身出世主義がいかんにして一つのイデオロギーとして機能したかについて論じ、それに伴う一般人の意識の屈折、身体に対する価値観の変容、新たな身体文化が誕生する過程を明らかにしている。

第2章「『父性』の観点からみる近代」では、日本社会の深層を支え、諸般の社会的現象のからくりとして機能してきた枠組みを「父性」として捉え、それがいかんにして日本近代という時空間を形成したかについて、序節:「公」と「私」の対立、(1) 家族国家主義の確立と「市民」の否定 (①擬制「父性」の出現, ②「父性」の矛盾と近代の自覚, ③「国家主義」の深化と「家」への否定)、(2) 森鷗外における「父性」(①「森林太郎」対「森鷗外」, ②守る「父性」-『かのように』論)、(3) 夏目漱石における「父性」(①漱石と「父性」, ②『私の個人主義』と天皇制)、(4) 家族の身体 (①長男と次男の身体, ②良妻賢母の身体) の各節において考察し、鷗外と漱石についても、それぞれの伝記的事実および作品分析によって彼らにおける「父性」の現われ方を明らかにしつつ、第3章以降への展開に繋げている。

第3章「個と身体-漱石文学における身体性-」では、(1) 不安と身体-漱石の留学と身体の有様- (①身体の自覚, ②「個人」の発見)、(2) 自意識と身体の変容 (①拡大される身体, ②射影としての身体)、(3) 装う身体-文化としての身体- (①「白シャツ」に見る近代性, ②衣服の身体文化)、(4) 漱石と近代スポーツ (①漱石の自転車, ②漱石における近代スポーツと文明批判)、(5) 東洋への回帰と身体性 (①神経衰弱と身体の外, ②生命の危機と他者の発見)、(6) 精神への傾倒と身体の変容 (①「則天去私」と身体, ②『明暗』における身体-「則天去私」と相対的認識)、(7) 『道草』における身体: 作品論的アプローチ (①作品の構造, ②身体に刻まれた過去と不安の原型, ③孤立への恐怖と関係としての身体, ④未来の喪失と身体の変容) という構成によって、前章までの時代分析を踏まえながら、漱石の文学作品に描かれる身体の様相が「個人」の観点から具体的に分析され、不安に苛まれる近代人の脆弱な内面と「身体」とが連動しつつ形象化されていることを明らかにしている。

第4章「公と身体-鷗外文学に見る身体性-」では、(1) 自然科学の身体 (①日本近代の自覚, ②衛生学と身体)、(2) 初期鷗外における身体性 (①制服の身体, ②挫折する官僚-『舞姫』論-)、(3) 公人としての身体性と文学的精神 (①官僚の身体性-培われた整理癖-, ②「諦念」と文学的精神)、(4) 人体と精神のシンボルとしての「目」 (①人体と身体-作品表現に現れた身体意識-, ②目という精神)、(5) エロスとロゴス (①「性欲」と「恋愛」, ②Dionysos 対 Apollon)、(6) 死に至る形式 (①殉死の身体-歴史小説における死の形式-, ②石見人鷗外森林太郎) という構成によって、鷗外の身体意識の基点を自然科学と「公」に求めつつ、彼の携わった衛生学における身体がもともと国家に収斂される位相のもとにあったこと、さらに彼の作品世界に現れる身体性が自然科学的な物質性を帯びた客体として描き出される傾向が顕著であることを明らかにしている。さらに「エロス対ロゴス」、「殉死における身体性」の分析を通して、鷗外にあっては、結局のところ、身体性よりも精神性が優位に置かれ、最終的には「石見人鷗外森林太郎」として死ぬ(身体の変容) 選択に繋がった、としている。

(4) 本研究の結論

漱石作品への身体論的アプローチからは、近代的自我における個の自覚のたどり着いた先が「空虚な実存と孤立」であり、しかもそれが身体性とときわめて密接に関連して描かれていること、また、身体への過度な執着は、近代が個人に強いたひとつの桎梏として立ち現れていることをあきらかにした。鷗外作品への身体論アプローチからは、彼が人間身体の変容を加速させた自然科学的描写を踏まえながらも、象徴論的手法の援用によって身体に絶えず価値を付着させることで国家権力に収斂されない精神の優位性を描き出していることを、「エロス」「鷗外自らの死への備え」の分析を通して明らかにした。そして、漱石と鷗外が描いた

近代的身体の様態は、現代におけるわれわれ自身の身体観の淵源をなすものである、としている。

審査の結果の要旨

本研究は、日本近代において新たに立ち現れることになった身体性について、近代的な文学形式である小説作品においてどのように形象化されているかを、人文学的教養を基礎とする夏目漱石と自然科学的教養(衛生学)を基礎とする森鷗外それぞれの作品世界の分析を通して明らかにしようとするものである。前半部では、「立身出世主義」および「父性」を分析枠組みとすることで、単なる年代的記述では明らかにしにくい日本近代が内包する特殊性を浮かびあがらせることに成功しており、その方法論について、歴史学専攻の審査員から高い評価を受けた。後半部の漱石論については、「個人主義」を軸に、漱石文学における身体性の立ち現われ方が「近代」という時空間の中できわめて不安定な状況下におかれたものであったことを、綿密な作品分析を通して明らかにしている。(病跡論的研究に関する検討不足についての指摘があったが審査終了後に文献資料を補足した。)また、漱石と近代スポーツとの接点についても、先行研究のレベルを超えた考察を展開し、それが文明批評に繋がるものであることを明らかにしている。鷗外論については、陸軍軍医総監という最高レベルの官僚でありながら、かつ第一級の文学者としても活躍した彼の作品(衛生学的論文も含め)について、身体論を軸に分析するという新しい試みを展開し、自然科学的教養を背景とする鷗外の描き出す身体性がきわめて sachlich なものであること、さらに象徴論的表現の手段としても活用されていることを明らかにしている。総じて、本研究は、文学作品を資料とする身体論研究に新たな道を開くものと言え、体育学研究にとっても大きな意義を有するものと評価できる。

よって、著者は博士(学術)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。